

令和3年度「体験の風をおこそう」運動推進事業
チャレンジキャンプ
夏の挑戦



1. ねらい

- ① 日頃の生活では体験できない活動への挑戦を通して、挑戦すること、つながること、感謝することを体感し自己肯定感を育む。
- ② 自然体験や地域でのお手伝い等を通じて主体性や社会性を培い、仲間との信頼関係を築く。
- ③ 「早寝早起き朝ごはん」国民運動を通じた基本的生活習慣の確立を図る。

2. 実施日

令和3年8月14日(土)～8月21日(土) 7泊8日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

14名 / 15名

5. プログラム (要約)

このキャンプは、子どもたちが7泊8日をかけ「地域でのお手伝い」と「大洞山登山」に取り組むものである。小中学生が、日頃できない自然体験や地域でのお手伝いに主体的に取り組む中で、自己を見つめなおす。友だちと協働して活動に取り組むことにより社会性を培い、新たな仲間との信頼関係を築く。また基本的生活習慣の確立を図りながら、挑戦、つながる、感謝する心を学び、自己肯定感を育むことをねらいとするプログラムとした。



日	主なスケジュール
14日	はじめましての日
	国立曽爾青少年自然の家 (集合) ・ 始まりの会 ・ 野外炊事 (カレーライス) ・ グループT I M E (目標設定) 【宿】 国立曽爾青少年自然の家
15日	農業でのお手伝いの日
	自然の家→ライスセンター→村内ほうれん草畑 自然の家→村内トマト農家 【宿】 国立曽爾青少年自然の家
16日	林業でのお手伝いの日
	自然の家→森林組合→村内民有林→村有林→自然の家 【宿】 国立曽爾青少年自然の家
17日	大洞山への移動準備の日
	大洞山への移動準備 ・ 野外炊事 (ピザ・ポトフ) ・ テント設営選手権 【宿】 国立曽爾青少年自然の家
18日	出発の日
	曽爾青少年自然の家→スカイランドおおぼらキャンプ場 ・ チャレンジベース設営 ・ 野外炊事 (すき焼き等) 【宿】 スカイランドおおぼらキャンプ場
19日	大洞山登山の日
	スカイランドおおぼらキャンプ場→大洞山登山 (石畳コース) ・ 野外炊事 (肉じゃが等) 【宿】 スカイランドおおぼらキャンプ場
20日	大洞山から自然の家へ帰る日
	スカイランドおおぼらキャンプ場→曽爾青少年自然の家 ・ 使用物品の片付け ・ 野外炊事 (焼肉等) ・ 各班でのキャンドルファイヤー 【宿】 国立曽爾青少年自然の家
21日	すべてに感謝!の日
	・ グループT I M E (ふりかえり・冬までにがんばること) ・ 終わりの会 国立曽爾青少年自然の家 (解散)
冬の挑戦へつづく	



8月14日(土)【1日目】

全国から44人の応募があり、志望動機を基にした選考の結果、奈良、大阪、三重、愛知から、小学生9名、中学生5名の計14名が曽爾青少年自然の家に集まった。不安と期待を胸に、7泊8日を共に活動する異年齢男女混合の1班4～5名の3班構成で、「チャレ

ンジキャンプ」夏の挑戦がスタートした。

午前中に始まりの会、オリエンテーションなどを行い、午後から本格的な活動が始まった。

夕食の野外炊事は、「班づくり」をねらいとして行った。緊張していた参加者の表情が少しずつ和らぎ、楽しみながら活動に取り組んでいる様子を見ることができた。グループ TIME では班の中で相談を重ね班の目標を作り上げた。一日の終わりに行う「夜のつどい」では、ふりかえりシート「チャレンジカード」を基にふりかえりを行い、一人一人が翌日の活動に向けて意識を高めていた。



8月15日(日)【2日目】

「農業のお手伝い」を行った。

午前中は JA 奈良県曽爾村出張所が管理するライスセンター営農指導員の中森さんから曽爾の農業についてお話を聞いた。その後、トマトの出荷作業とほうれん草畑を見学した。午後からは、トマト農家の畑で、除草、施肥、収穫等のお手伝いを行った。初めて体験する農作業に子どもたちは興味津々な様子で、一人一人が主体的に活動に取り組んでいた。

「夜のつどい」では、「トマトの収穫を人生で初めて体験することができ感動した」、「実際に体験したことで、農業の面白さを知ることができた」、「農業は一人ではできないことに気付いた」という声を聞くことができた。



8月16日(月)【3日目】

「林業のお手伝い」を行った。曽爾村森林組合で始まりの会をした後、村内の森林に移動した。森林

組合のスタッフの指導のもと間伐、皮むき等のお手伝いを行った。皮むきのお手伝いでは、友だちと相談しながら技術を高め合おうとする姿を見ることができた。午後からは、鎌の使い方の講習を受けた後、下刈り作業のお手伝いを行った。初めて手にする鎌に戸惑いながらも、汗を流し作業に取り組んでいた。作業後の自然の家での講義では、林業を支える新たな技術であるドローンについても触れながら、今後の林業の展望についてお話を聞くことができた。

「夜のつどい」では、「森を守ることが、自分たちの生活を守ることにつながることに気付くことができた」、「林業の面白さを知ることができた」という声を聞くことができた。



8月17日(火)【4日目】

大洞山移動の準備を行った。活動準備のアナウンスを行った後、テント設営練習がスタートした。初めて扱うテントに試行錯誤しながらも、翌日からの生活をイメージし、班全員で協力しながら取り組んでいた。



昼食はピザとポトフを作った。初めて体験するピザ作りに、子どもたちは楽しみ協力し合いながら取り組んでいた。

午後からは個人の持ち物を準備した後、テント設営選手権を行った。作戦タイム、試合、ふりかえりというサイクルで、班の団結力を高めた。



8月18日（水）【5日目】

チャレンジキャンプも後半に突入した。今日はキャンプ地へ向かう日である。朝7:00に出発し13kmの道のりを徒歩で移動した。雨天という厳しい条件の中であったが、各班声を掛け合いながらスカイランドおおぼらキャンプ場に到着することができた。



到着後は、2泊3日のキャンプを行うためのテント設営を各班で行った。途中強風と大雨に襲われながらも一致団結して設営を完了させた。入浴後の野外炊事では、すき焼きとご飯を作った。キャンプ場での初めての食事作りに、各班楽しみながら取り組むことができていた。



8月19日（木）【6日目】

大洞山登山の日である。前日から続く雨天の中登山を行った。出発のつどいを行った後、準備ができ

た班から出発した。声を掛け合いながら一步一步着実に体を山頂に近づけようと努力していた。1、3班が大洞山雄岳山頂を越した所で雷が近くで発生したため、2班は安全確保のため途中下山した。

午後からは、大雨により冷え切った体を温泉で温めた後、野外炊事を行った。キャンプ場での生活に慣れ始め、スムーズに準備を行うことができていた。



食後は小学生、中学性に分かれてたき火会を行った。3つのグループに分かれ、このキャンプで学んだこと、将来の目標とすること、友人関係に関すること等を大いに語り合う時間を過ごした。



8月20日（金）【7日目】

スカイランドおおぼらキャンプ場から自然の家に帰る日である。朝食後、2泊3日を過ごしたテント類の撤収作業を行った。この日も雨天の中での活動となったが、全員が片付け作業に集中し取り組んでいた。自然の家に戻ってから、雨に濡れた道具類の片づけをした。

昼食後、各自の荷物の整理を行った後、このキャンプでの最後の野外炊事を行った。BBQ、炊き込みご飯、鮭のホイル焼きという多様なメニューを各班で段取りを考えながら調理をすることができていた。夜は班ごとにキャンドルファイヤーを囲み、一週間のふりかえりを行った。

8月21日(土)【8日目】

チャレンジキャンプ最終日は、朝からテント類の片付けを、制限時間とルールを設定しゲーム性を取り入れた形で実施した。テントを解体するチーム、畳むチーム、袋に収納するチーム等に自分たちで役割分担しながら取り組めたことから、制限時間内に完了することができ、子どもたちはみんなで達成感を味わっていた。

グループ TIME ではこのキャンプで学んだことを模造紙にまとめる活動を行った。その後は、各班で工夫をこらしながら発表の準備を行った。

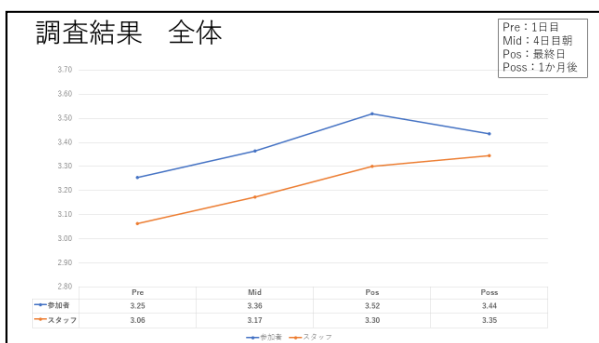


午後からの終わりの会では、仲間や保護者が見守る中この一週間で学んだこと、気付いたこと、今後の目標等を発表することができた。

冬の挑戦まで、それぞれの場所で目標を持って過ごし、さらに成長した姿で再会することを約束して別れた。

7. 調査結果

自己肯定感とほぼ同義である「自尊感情」をキャンプ前後で比較しました。調査対象は参加者と学生ボランティアで、アンケートはキャンプの直前、中間(4日目朝)、キャンプ直後、キャンプ1ヶ月後の計4回で測定しました。



調査の結果からキャンプを通して自己肯定感が育まれたことを確認することができました。

8. まとめ

非日常の時間の中で、様々な活動を通して「つながり」を実感させたい。そこから、自分自身を見つめ直し、自信を備え、各自の目標に向かって歩いていく姿勢を養いたい。そうした思いを基にチャレンジキャンプを企画し実施した。

毎晩の「夜のつどい」では、日が過ぎるにつれて、一人一人のふりかえりが深化し共有し合う姿を間近に見ることができた。

次は冬の挑戦である。一人一人の思いを受け止め事業を展開していきたい。

(企画指導専門職 森本 貴仁)

令和3年度教育事業 チャレンジキャンプ
冬の挑戦



日	主なスケジュール
8日	再会の日
	国立曽爾青少年自然の家（集合）
	・はじまりの会 ・グループT I M E（目標設定） ・村づくり
	【宿】国立曽爾青少年自然の家 キャンプ場
9日	三峰山登山の日
	・三峰山登山
10日	【宿】国立曽爾青少年自然の家 キャンプ場
	すべてに感謝！の日
	・グループT I M E（ふりかえり・これからがんばること） ・終わりの会
	国立曽爾青少年自然の家（解散）

1. ねらい

- ① 日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感を得て、自己肯定感を高める。
- ② 自然体験を通じて主体性や社会性を培い、仲間との信頼関係を築く。
- ③ 早寝早起き朝ごはん運動を通じた基本的生活習慣の確立を図る。

2. 実施日

令和4年1月8日(土)～10日(月・祝) 2泊3日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

13名 / 15名

5. プログラム（要約）

夏に7泊8日をかけ「地域でのお手伝い」と「大洞山登山」を実施した仲間と再会し、この間の出来事を話し合い、新たなチャレンジに取り組む機会とした。厳冬期間のキャンプと三峰山における冬山登山を軸とした。新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、日ごとのねらいを確実に設定すると共に、キャンプの経験を今後活かしていくために、キャンプ後の自分自身を思い描く時間を多くとった。



1月8日(土)【1日目】

6か月ぶりの再会。13名が曽爾青少年自然の家に集まった。「元気だった？」という声が飛び交い、再会を喜ぶ参加者たち。

はじまりの会、オリエンテーションなどを行いグループT I M E から本格的な活動が始まった。



はじめのうちこそぎこちなさがあったものの、活動が始まると、夏の頃の家族的な雰囲気にあっという間に戻っていく。



昼食後冬山登山の説明及び準備をおこなった後、キャンプ場にて「村づくり」を行った。各班に提供された資材や道具及び自然の中から調達してきたもの等を活用し、2泊3日を過ごす自分たちの「村」を作り上げた。



「夜のつどい」では「明日の登山をがんばりたい」、「声を掛け合いながら全員で登り切りたい」や、「班の友達が夏のキャンプの後挑戦してきたことを聞くことができてよかった」等の声を聞くことができた。

1月9日（日）【2日目】

活動準備と朝食を手早く進め、三峰山登山へ出発。



天候は快晴であり、一步一步を踏みしめながら山頂への歩みを進めた。あまり見ることのない、雪の世界に心を躍らせながら、夏のように「しりとり」や「クイズ」など他愛のない会話が飛び交った。



山頂では無事登頂できたことを、仲間同士で喜び合っている様子を見ることができた。

下山後は班の時間とした。焚火を囲みながらふりかえりをしたり、自分たちの村をより快適なものにしようとしている様子を見ることができた。



夜のつどいでは「本格的な雪山は初めてで不安だったけど登れてよかった」、「雪遊びができて楽しかった」や、「一人では登れなかった。班のみんなが居たから登りきれた」という声を聞くことができた。

1月10日（月・祝）【3日目】

起床後、身の回りの整理整頓と朝食をすませ、「村」の片づけを行った。

グループ TIME では、このキャンプで学んだこと、これから挑戦したいことを模造紙にまとめる活動を行った。その後は、各班で工夫をこらしながら発表の準備を行った。

午後の終わりの会では、仲間や保護者が見守る中、このチャレンジキャンプで学んだこと、気付いたことや、これから挑戦したいことを自信を持って発表することができていた。



6. まとめ

参加者からは「普段できない活動に取り組めて本当に良かった。ここで学んだことを学校生活で生かします。」や「主体的とは何かをキャンプを通して気付きました。」等という感想があった。このキャンプの活動を通して青少年の自立に寄与するという、自然の家の役割を改めて参加者に認識させてもらったように思う。

（企画指導専門職 森本 貴仁）